折にふれて歌へる[[1]](#footnote-1)

李光洙

天地のいづくはわが家ならざらむ仰ぐ御光果てしあらねば

好き人の文讀む程に何時となく申す身となりにけり

のの民草と君わが君と仰ぎまつらむ

とこしへの濁りに喘ぐ黄河の流れも澄みて君が代となる

の我がの夜も明けぬらむかの雲の端に映ゆる

恩愛の羈絶ちてぞ恩愛のえにしのものを救ひこそせめ

われと云ふかたきを討ちてそのたゝかひは去年も今年も

まごゝろのしめすにひたすらにわれは生きなむその日その日を

ひととせを又なすなくて過ごしけりあくる年はと又誓ひつゝ

1. 『東洋之光』1939年2月号 [↑](#footnote-ref-1)